

幼稚園の質を維持させる者は何が必要だろうか？

前書き

幼稚園の質は多く研究されたが、系統的に園長の幼稚園の質に対する影響についての研究はほとんどなかった。理論的でも経験的でも園長は実に幼稚園の質を維持させる者であると否定できなかった。そこで、実際に園長と幼稚園の質の間にどのような関係があるだろうか。

園長と幼稚園の質の相関性

Powell と Stremmel(1989)の研究では、園長は教師の専門知識の獲得に対して影響が大きいと分かった。

園長の教育程度と経験は幼稚園の質と正の相関がある。経験豊富の園長がいれば、幼児の言語と社会能力の表現はより良いのである(Kontos & Fiene, 1987)。園長の正規教育程度、特に幼児教育に関する訓練及び行政的訓練は幼稚園の質と強い相関がある(Bredenkamp, 1989)。

園長のリーダーシップとしての訓練は園内全体の雰囲気を上昇させ、幼稚園の質に影響した(Bloom & Sheerer, 1991)。

園長の幼児教育における豊富な訓練は、幼稚園の質を左右する重大な指標である。園長はせめて学士号もしくは修士号を持つべきだ(Bredenkamp, 1989)。

園長として必要な能力

個人の変数と幼稚園の変数が多いため、園長は仕事範囲と程度に基づき必要とされる能力を考えるべきである。Bush と Wormam(1985)は一般の幼稚園に基づき園長の能力を 4 部分に分けて探究した。

- (1) 組織に対する理論及びリーダーシップ：幼稚園の需要と未来への展望が分からなければならない。また、人事の仕事に関するスキルは重要である。そして新しいインフォメーションの獲得も常にしなければならない。
- (2) 幼児の発達と幼児教育のカリキュラム：幼児発達の理解と応用が必要である。幼児の健康と安全に大きい責任を負っているため、それらに関する知識を持つべきである。
- (3) 財務と法的事項：園長は政府からの規定と命令を処理し答えるので、相関がある法律の理解が必要である。また、園長は経費募集の方法と計画を作るべきである。
- (4) 内部と外部への人間関係：園長はたくさんの関係の中での協調者である。

終わり

筆者は最近の調査では、園長の学歴の多くは専科(=専門学校)卒であり、園長経験の多くは1~5年間であると分かった。しかし、大半の園長は現状のままで今の仕事を進めており、進学を考える園長は極僅かである。ただし、調査を受けた園長の多くは、現在の研修が内容でも形式でも自分に似合わないと考えた。園長たちが期待している研修内容は、組織、リーダーシップ、内部と外部への人間関係、そして法令に関する学習であり、現職教師の成長を協力するのに自信を欠いている。しかし、現在の研修内容は未だに幼児発達、授業、カリキュラムなどのテーマに注目している。ゆえに、幼稚園の質を上昇させるためには、園長の需要に合う現職研修が必要である。

幼児教育の質は幼稚園園長に繋がる

近年、幼稚園の需要が増えるに伴い、大量の幼稚園が設立された。量の問題の後に来るのが質(quality)の問題である。台湾の教育部(=文科省)は1991年から6年間の全国幼稚園評価計画を実行した。しかし残念ながら全体的な評価結果に基づくレポートはなかった。それでも評価委員の意見では、我が国の大半の幼稚園の質はまだ高める必要があるということだった。

アメリカの研究(Cost, Quality and Child Outcomes Study Team, 1995)では、14%の幼児教育機構の質は良好と評価された一方、80%以上の機構は普通或いは不良と評価された。良好という機構を他に相関の研究に合わせて分析したら、園長自身の経歴と専門職化のトレーニングは幼稚園の質に影響する重要な要素の一つであると分かった(Bloom, 1989, 1991; Bloom, Sheerer, & Briz, 1991; Bredekamp & Willer, 1996)。

1980年代から、学者たちは幼稚園の質を評価する方法と尺度について密接に討論し始めた(NAEYC, 1984)。しかし、系統的に幼稚園園長及びリーダーの役割に対する研究が少なかった。特に園長が教師の仕事環境と授業の質に対する、ポジティブ或いはネガティブな影響についての研究は未だに少ないのである。

また、幼稚園園長になる必要条件に対して研究者たちはまだ合意していないため、その必要条件を園長の合格免許における基本条件に編入できるはずもないだろう(Bloom, 1992)。そして、Lightfoot(1992)のある質的研究において、大多数の園長は行政的な訓練を受けておらず、限られたインフォメーションと個人経験で管理するしかないことが分かった。その中に、最も使われた方法は“試行錯誤”である。Culkin(1995)の研究もこの結論を支持した。

園長の資格と訓練

幼児教育機構の園長資格の規定(Child care program director)について、1994年の統計結果(Morgan, Azer, Cosley, Genser, Goodman, Lombardi & McGimsey)では、アメリカ50州の中に、18州だけが卒業で学校管理に関する単位を要求していた。他の多数の州は、短い現職者研修のみを規定し、さらに7つの州も18歳以上という条件以外は全く園長に対する要求がなかったという。

台湾では、幼稚教育法において園長になるには試験の合格が必要であり、「園長と教師採用方法」(教育部, 民72=1983)でその資格を制定したが、園長に対する訓練の欠如はアメリカとあまり変わらないのである。採用の測定方法は教育程度で定められ、幼児教師免許の取得後2~4年間の実務経験だけが必要である。これにより、園長という専門職に対する要求は一つの仮説から成り立っていると分かった：合格した幼児教師は2年以上の実務経験

があれば、幼稚園全体の事務を管理する能力があり、幼児教育の質を維持できる園長になれるということだ。しかしこの仮説は毎年の資料から実は成り立っていないと分かった(台北市政府教育局, 民 89=2000)。

幼稚園と似ている保育園の園長の資格に対しては既により高い基準を求めた。内政部は1995年に児童福祉専門職員資格要点(=児童福利専門人員資格要点)を定め、保育園長は最低2年以上の保育経験、かつ270時間の専門課程単位の履修が要求される。このことから、保育園園長の専門職化の重要性が既に意識されたと分かった。

園長の職務責任と役割

幼児に高い質の学習環境を提供するために、幼稚園園長の仕事内容と責任は一体何だろうか。

Culkin(1995)は9つの範囲をまとめた。①予算編成；②人事管理；③設備の購買；④新任者の面談；⑤訓練；⑥現職者研修；⑦保護者教育；⑧各担当のスタッフの間のコミュニケーションと協調；⑨最初の教育理想を維持する努力。

Burch(1988)はリーダーシップを3つにまとめた。①幼稚園とスタッフに正常に働かせることの維持；②行政的管理の方法を良く使えること；③必要とされる現職研修を提供すること。

Billman(1995)は9つに分類した。①財務管理；②人事管理；③環境の設計と維持；④幼児に適するカリキュラムの設計；⑤健康と安全；⑥食べ物と栄養；⑦保護者との協働；⑧幼稚園理念の構築；⑨授業の発展と評価。

Morgan(2000)は8つにまとめた。

- ① 適切な幼児カリキュラムの計画と実行；
- ② 学校組織の維持と発展；
- ③ 効率的な行政システムを計画し実行すること。中期、長期、短期の教育目標を達成させること；
- ④ 有効的な人事の運用と、スタッフ研修の推進；
- ⑤ 地域と良い関係の維持；
- ⑥ 環境の維持と保護；
- ⑦ 幼児教育に関する法令を実行する能力を持つこと；
- ⑧ 財務の計画と管理。

我が国の幼稚園園長に関する研究文献はまだ少ない。幼稚教育法の中で、幼稚園に一人の園長を置き、園内事務の管理をし、専任であり、園内授業の担当も可であるということのみが説明されたが、園長の仕事内容と責任ははっきりと説明されていない。そこで、南海幼稚園園長漢菊徳園長(民 85=1996)は園長の責任を分析した。

1. 業務計画を作成する；

2. 環境を計画する；
3. カリキュラム目標とアウトラインを起草する；
4. 家庭教育を計画する；
5. 現職者研修を計画する；
6. 思想と政策を含め、最新のインフォメーションを提供する；
7. 各種の社会的資源を捜し求める；
8. コミュニケーションし、協調し、相談させる；
9. 授業、保育とカウンセリングを監督する；
10. 各種の建築工事を監督する；
11. 人事の採用と評価を参加し決定する；
12. 園内会議を召集する；
13. 幼稚園の代表として校外会議に出席する。

そしてこれらの内容から、6つの役割を整理した。

- ① 幼稚園事務発展の設計者；
- ② 幼稚園の監督者；
- ③ 協調と協議する者；
- ④ 教師の支持者；
- ⑤ 幼児のカウンセラー；
- ⑥ コンセプトのリーダー、仕事の参加者、そして良い会議の司会者。

簡楚瑛(民 87=1998)は教育の質を高めるために、園長の役割を行政者としても授業者としても分割できないものであると強調した。許玉齡(民 89=2000)は2人の園長にインタビューしたことから、園長は仕事をこなすためにたくさんの役割を担うことが分かった。

園長の仕事内容、役割と専門能力に対する分類は各研究者によって異なるが、共通点をまとめると、第一、園長は幼児以外、校長、社長、教師、保護者、そして地域の人々と対面するため、園長の責任は多面的であり、範囲も広く種類も複雑である；第二、授業と保育を除き、財務、人事、法令政策、地域関係、成人のリーダーなどの能力は園長の責任として必要とされるのだと認められた；第三、園長の責任は、実行ということだけではなく、計画、維持、管理という行政的プロセスと能力は既に重視されたということが分かった。

園長の専門職能力の源

このように多種多様な仕事をこなさなければならないにもかかわらず、事前に完全な訓練を受けていない園長は、如何に責任を果たす能力を習得したのだろうか。Billman(1995)は仕事達成の源を8つ整理した。

- 第一、実際に仕事する。すなわち行動による学習(learning by doing)；
- 第二、他の園長や経験者に教えてもらう；

- 第三、自身の幼児教育経験。これは特に教育と保育に対する監督に有用である；
- 第四、研修活動やシンポジウムに参加する；
- 第五、園長組織に参加することは、インフォメーションの吸収に助かる；
- 第六、一般会社での仕事経験は、行政的事務により役に立つのである；
- 第七、昔学校で履修した授業；
- 第八、自ら本を探して読む。

のである。以上のことから、アメリカの園長たちは専門職に対する訓練に既により多面的な需要があることを明示している(Culkin, 1995; Morgan et.al., 1994; Rafanello & Bloom, 1997)。

園長の窮地

園長は仕事する時に経験する挫折の源は何だろうか。原因が分かれば、解決法も考えられるだろう。近年台湾の園長会議で、園長たちの討論と発言から、一部の挫折は園長自身の専門能力と仕事への期待からなるかもしれないと発見された。例えば、公立幼稚園の園長のポジションがあいまいであり、専門として発揮できない。或いは専門能力が足りないのである。私立幼稚園の園長は幼児募集のプレッシャーがあり、専門能力の不足で保護者の要求を満たすことができず、或いは仕事環境が良くないという問題がある。そして、一部の挫折は、一緒に仕事する仲間からもたらされる。許玉齡(民 86b=1997b)の調査では、幼稚園教師は園長に期待を持っていることを明示した。そして、その期待と現状は大きな差がある。このことから、教師の園長に対する職務の希望と役割の認定は、園長の職務遂行に促進もしくは妨害する要因の一つかもしれないと分かった。

園長の専門職についてまだ研究が必要

まず、幼稚園園長の職務内容と必要とされる技能の内容から、この専門職を獲得するもしくは妨害する源をより深く探求することができる。そしてこれらの研究結果が、法の準拠と養成課程への示唆になり、園長の挫折を減少し、園長により効率よく仕事をこなせるようにさせられるだろう。また、園長というポジション以外の人に園長の仕事を理解させ、コミュニケーションの増加で園長を支持させるようにする。この一連のことができれば、幼児教育の質は少しずつ上昇すると考えられる。

シンガポールにおける「保育の質」に関する研究

分担研究者 野口 隆子 十文字学園女子大学人間生活学部専任講師

本研究では、シンガポールの保育・幼児教育に着目した先行研究、資料をもとに、就学前教育におけるカリキュラムの特徴、そして幼児教育・保育の質がどのように捉えられ位置づけられているかまとめた。シンガポール教育省による資料、「就学前教育の教育期待目標」に向けて幼稚園が実践するための自己評価尺度、PEAK（Pursuing Excellence at Kindergartens）の特徴から、就学前における言語教育を中心とした学習のための教育が実施されていることが示唆された。

A. 研究目的

本研究では、シンガポールの保育・幼児教育に着目した先行研究、資料をもとに、就学前教育におけるカリキュラムの特徴、そして幼児教育・保育の質がどのように捉えられ位置づけられているかについて、概略を述べた。

B. 研究方法

シンガポールの乳幼児教育政策に関する専攻研究・文献、そしてシンガポール教育省の資料を収集し、検討をおこなった（収集した文献の翻訳に関しては淀川裕美さん（東京大学）の協力を得た）。

C. 研究結果

シンガポールでは、2000年教育省（Ministry of Education, MOE）による「就学前教育の教育期待目標」（Desired Outcomes of Pre-school Education）が発表され、2003年には「シンガポールにおける幼稚園教育カリキュラム・フレームワーク」が出されている。質の良い幼稚園教育カリキュラムの基準として6つの指導原則と実践方針が示されている。教育省による「就学前教育の教育期待目標」に向けて幼稚園が実践す

るための自己評価尺度、PEAK（Pursuing Excellence at Kindergartens）では、幼稚園が自己評価をおこなうことによって継続的に自らの実践を問い、改善を図ることを目的としている。効果的な幼稚園及び園長等管理者、教師、子どもの特徴についてチェックできるような5段階の項目リストが設けられている。子どもの好奇心や欲求、興味、直接経験の重視といった面においては、日本の保育・幼児教育に若干共通する部分もあるようだが、学習や学習のための環境づくり、計画、評価について全体的に明確に述べられている点は日本と多に異なる点であろう。

D. 結論

シンガポールにおいて、カリキュラムや保育の質を捉える観点において、学習（思考や言語）の重要性が指摘されているが、シンガポールは日本とは異なる言語教育政策の歴史を持つこと、また幼児教育・保育の質の観点は各々の歴史的・文化的背景をふまえた上で比較検討し、議論していく必要があるだろう

<資料1>

シンガポールにおける保育の質

本報告では、まずシンガポールの保育・幼児教育に着目した先行研究、資料をもとに、就学前教育におけるカリキュラムの特徴について簡単にまとめる。そして近年シンガポールにおいては、保育の質がどのように捉えられ位置づけられているのか、教育省による資料を中心に紹介する。

1. シンガポールにおける就学前教育カリキュラム

シンガポールでは、2000年教育省（Ministry of Education, MOE）による「就学前教育の教育期待目標」（Desired Outcomes of Pre-school Education）が発表され、2003年には「シンガポールにおける幼稚園教育カリキュラム・フレームワーク」が出されている（資料1参照）。

その背景として、池田(2006)はシンガポールの現状について次のように述べている。他民族・多言語国家という社会的状況とともに、小学校から能力判定試験をもとにした能力別教育が実施されている教育政策の中、幼児教育が小学校の準備教育として捉えられ、知識追求型の教育がおこなわれている。それに対し、教育省が上記のような枠組みを示すことにより、幼稚園教育の役割を生涯学習力や探求力、創造性を重視した教育内容・方法へと方向づけるように唱えたという。

「シンガポールにおける幼稚園教育カリキュラム・フレームワーク」の中で、子どもという存在は自然に、そして積極的に学び、観察・探求・想像・発見・調査・情報収集・知識の共有を楽しむ存在であると位置づけられている。そして、“幼稚園教育は、小学校以降の教育のための準備期間として受け止められてきたが、準備期間としての性質のみではなく、幼稚園教育自体がきわめて重要なものであると考える。小学校教育のカリキュラムが簡素化された内容を子どもたちに提供することで、幼稚園教育における学びが促進されると考えてはならない”という点が示されている。

学校教育に対し、幼児教育の独自性を指摘する声は日本においても聞かれるが、日本の保育・幼児教育と大きく異なる点の1つが言語能力・言語スキルの重要性について明確に述べられていることにあるだろう。シンガポールにおける幼児教育の目標として、“生涯を通した学び手を育てるために、子どもたち考えるために学び、学ぶために考えることを育む必要がある。言語と思考は密接に関連しているため、思考の発達のためには言葉を発達させなければならない。そのため、幼稚園教育のカリキュラムにおいても、言葉のスキルに重点を置くことが求められる。生涯を通した学び手になれるかは、幼児期に個人的及び社会的なスキルを育む機会が与えられるか否かによる”ということが述べられている。

また、シンガポールにおいて、幼児教育が終わるまでに望まれる幼児教育の成果として、

以下のようなものがあげられている。

- ・何が正しくて何が誤りかを理解する
- ・進んで他者と共有し、きまりを守って交流する
- ・他者との関係づくりができる
- ・好奇心を持ち、探求できる
- ・理解しながら、聞いて、話しができる
- ・他者とともに快適で幸せに生活できる
- ・身体の協調と健康的な生活習慣を身に付ける
- ・家族、友人、教心、幼稚園を愛する

そして、質の良い幼稚園教育カリキュラムの基準として6つの指導原則と実践方針が示されている（資料1参照）。子どもの能力に応じた実践、子どもの好奇心や欲求、興味、直接経験の重視といった面においては、日本の保育・幼児教育に若干共通する部分もあるようだが、学習や学習のための環境づくり、計画、評価について全体的に明確に述べられている点は日本と多に異なる点であろう。

指導原則をどのように実践でおこなっていくか、という点についても、具体像が示されている（資料2参照）。環境作りは学習ための環境であり、学びと教育を充実させるための基準が設けられている。目的を明らかにする／子どもたちの注意を焦点化し、関心をもたせる／子どもたちの意識を広げる／大人や他の子どもたちとの相互交渉を促す／学びを支えるためのフィードバックをする／活動の終わらせ方、などであり、この基準を基にしたカリキュラムの計画と実行、それに関する評価のサイクルが必要であるとされている。

保護者との協力について述べられている箇所を見ると、協力的な関係性や情報の伝達、保護者の参加など、園の教育に関する事だけでなく、保護者が家庭において子どもの学びをいかに広げるかについて述べられている。ここでも子どもの発達の中で特に読む能力・書く能力、数量的思考能力について言及されていることから、園の教育だけではなく家庭での取り組みの重要性が意識されていることがうかがえる。

先行研究によると、幼稚園におけるバイリンガル教育とカリキュラムの内容は園によって様々なものがあること、保護者の経済的状況や家庭の言語環境、保護者の移行によって幼稚園が選択されることが指摘されている（高橋,2005、2006）。シンガポールのカリキュラムや保育の質を捉える観点において、就学前の早期からおこなわれる言語教育が小学校以降の教育にどのようにつながっていくのか、言語習得過程と早期教育との関係について検討することには意義があると考えられる。しかし、シンガポールは日本とは異なる言語教育政策の歴史を持つこと、また幼児教育・保育の質の観点は各々の歴史的・文化的背景をふまえた上で比較検討し、議論していく必要があるだろう。

2. 幼稚園自己評価—PEAK (Pursuing Excellence at Kindergartens) 幼稚園におけるより良い保育の質の追求—

次に、教育省による「就学前教育の教育期待目標 (the Ministry of Education's Desired Outcomes of Pre-school Education)」に向けて幼稚園が実践するための自己評価尺度、PEAK (Pursuing Excellence at Kindergartens) を紹介し、その特徴について述べる。

PEAK では、幼稚園が自己評価をおこなうことによって継続的に自らの実践を問い、改善を図ることを目的としている。効果的な幼稚園及び園長等管理者、教師、子どもの特徴についてチェックできるような5段階の項目リストが設けられている(資料3参照)。

PEAK には、大きく6つの基準が設けられている。基準とは、「リーダーシップについて」、「管理について」、「スタッフの養成と管理について」、「保育計画について」、「カリキュラムについて」、「環境について」であり、それぞれの基準について細かな下位項目が設けられている。また、そうした基準について、「基準に到達していない園」「基準に到達しつつある園」「ほとんどの基準に到達している園」「いくつかの基準を超えている園」「ほとんどの基準を超えている園」という5つの園のタイプを仮説的に設け、それぞれの園がどのような特徴を持っているのかを示している。

例えば、日本における私立幼稚園の自己評価(財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構,2006)と比較してみるとまた、日本の私立幼稚園自己評価の場合、自己評価項目が設置者・園長編と教職員編に分けられており、特に教職員編においては保育の在り方や幼児への対応に関する項目、教師としての資質や能力・良識・適正に関する項目、保護者への対応の項目がみられ、保育内容等に関する細かな項目が設けられている。

一方で PEAK の特徴を見ると、管理体制とともに園全体のあり方が具体例で示され、それがどの程度・どの段階にあるのかという評価の段階を明らかにすることができる自己評価だというような印象を受ける。また得点化とその方法が明確に示されていることも特徴的であろう。

参考文献・資料

- 池田光裕 (2006) 第7章シンガポール アジアの就学前教育—幼児教育の制度・カリキュラム・実践— pp159-181 明石書店
- 太田光洋・金田正一 (1993) シンガポールの就学前教育に関する資料(I) 旭川大学女子短期大学部紀要 16 pp163-170
- 太田光洋・金田正一 (1993) シンガポールの就学前教育に関する資料(II) 旭川大学女子短期大学部紀要 16 pp171-178
- 太田光洋・金田正一 (1993) シンガポールの就学前教育に関する資料(III) 旭川大学女子短期大学部紀要 16 pp179-188

斎藤里美・上條忠夫（編）（2002） シンガポールの教育と教科書ー他民族国家の学力政策
ー 明石書店

シンガポール教育省ホームページ

A Framework for Kindergarten Curriculum in Singapore.

http://www.moe.gov.sg/preschooleducation/curriculum_framework.htm

高橋美由紀（2005） シンガポール華人社会における未就学児児童のバイリンガル教育 兵
庫教育大学研究紀要 第26巻 pp169-177

高橋美由紀（2006） シンガポールのバイリンガル教育とカリキュラムー幼稚園における英
語と華語教育ー 兵庫教育大学研究紀要 第29巻 pp71-84

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構編（2006） 私立幼稚園の自己評価と解説 フ
レーベル館

<資料2>

A Framework For A Kindergarten Curriculum In Singapore

シンガポールにおける幼稚園教育カリキュラムの枠組み

Published by PRE-SCHOOL EDUCATION UNIT
MINISTRY OF EDUCATION, SINGAPORE

子どもたちはどのように学ぶのか

子どもたちはどんな存在？

子どもたちは自然に学ぶ存在であり、積極的な学び手である。

子どもたちは、

- ・ 観察 (observing)
- ・ 探検 (exploring)
- ・ 想像 (imaging)
- ・ 発見 (discovering)
- ・ 調査 (investigating)
- ・ 情報収集 (collecting information)
- ・ 知識の共有 (sharing knowledge)

を楽しむ。

これらの幼児期の経験は、学びへの積極的な態度を促進するような高レベルの相互交渉を提供する大人をケアすることで、より高められていく。それは、楽しくゆったりとした環境において、遊びと構造化された学びの両方を通して行われる。

幼稚園教育とは？

幼稚園教育は、小学校以降の教育のための準備期間として受け止められてきたが、準備期間としての性質のみでなく、幼稚園教育自体がきわめて重要なものであると考える。小学校教育のカリキュラムが簡素化された内容を子どもたちに提供することで、幼稚園教育における学びが促進されると考えてはならない。

シンガポールにおける幼稚園教育の目的

子どもたちが幼稚園で過ごす時間を通して、世界を観察し、探検し、発見することを楽しんでもらいたい。考える国、生涯を通じた学び手を育てるために、子どもたちが考えるために学び、学ぶために考える (**learn to think, think to learn**) ことを育む必要がある。

言葉と思考は密接に関連しているため、思考の発達のためには言葉を発達させなければならない。そのため、幼稚園教育のカリキュラムにおいても、言葉のスキルに重点を置くことが求められる。

生涯を通じた学び手になれるかは、幼児期に個人的および社会的なスキルを育む機会が与えられるか否かによる。

望まれる幼稚園教育の成果

幼稚園教育が終わるまでに、子どもたちは以下のことができている必要がある。

- ・何が正しくて何が誤りかを理解する
- ・進んで他者と共有し、きまりを守って交流する
- ・他者との関係づくりができる
- ・好奇心を持ち、探求できる
- ・理解しながら、聞いて、話しができる
- ・他者とともに快適で幸せに生活できる
- ・身体の協調と健康的な生活習慣を身に付ける
- ・家族、友人、教心、幼稚園を愛する

本枠組みは、保護者や教師が子どもたちの以下の性質やスキルを育てるようなカリキュラムをデザインすることができるよう、導くものである。

- ・健全な倫理観と社会的価値観
- ・他者とともに働き遊ぶ、よい習慣
- ・肯定的な自己概念と自信
- ・物事や周りの対象に対する強い好奇心
- ・英語と母国語を用いて、効果的に他者と情報伝達を行う
- ・身体的なコントロールおよび手先のスキル
- ・健康なライフスタイルに対する肯定的な見方
- ・肯定的な家族観と地域の強い絆

方針

以下の方針は、良い効果的な幼稚園教育の実践に基づくものである。質の良い幼稚園教育のカリキュラムのあるべき基準とは：

1. 発達と学びのための包括的なアプローチ
2. 統合された学び
3. 積極的な学び手としての子どもたち
4. 学びに関心のあるサポーターとしての大人
5. 相互的な学び
6. 学びの媒体としての遊び

方針1：発達と学びのための包括的なアプローチ

子どもの発達は、すべての側面が認識され、価値付けられるべきである。また私たちは、それぞれの好みと能力によって、ひとりひとりが異なる仕方学ぶ。これらのことを認識することが、それぞれの持つ能力を最大限伸ばすために必要である。

学びの経験において求められる6つの領域：

- ・美の感覚および創造的な表現
- ・環境に対する意識
- ・言葉と識字能力
- ・運動能力の発達
- ・数量的思考能力
- ・自己と社会に対する意識

美の感覚および創造的な表現

子どもたちが創作し、遊び、探索し、考えや感情を洗練させる過程で、ダンスや音楽、美術などを通して自分自身を自由に表現する機会を提供する。

環境に対する意識

自然の環境および人工的環境の両方に関する、新たな知識と理解に焦点を当てる。歴史、地理、科学の基礎を提供する。最初は身近な環境について認識し、観察し、それぞれの見たものを表現する。やがてシンガポールや世界に視野を広げる。

言葉と識字能力

ロールプレイ、歌、リズム、読書など文字を使った芸術活動を行うことで、話す、聞く、読む、書くといった子どもたちの相互的なスキルの発達を促進する。

運動能力の発達

運動能力の自然に起こるものではあるが、幼稚園教育においても当然と受け止め、無視してはならない。自由にのびのびと動き回ることができるよう、十分な時間と空間を確保する。また、子どもたちが自らの限界を知り、自信を持って冒険することを学ぶための、安全な環境を提供する。

数量的思考能力

子どもたちが実際に体験することと、場所を表す言葉、数を表す言葉、形の名前などを表す適切な言葉の獲得と使い方に重点を置く。

自己と社会に対する意識

充実した人生を送るため、他者と協力して自分の目的を成し遂げられる子ども、思いやりがあり、礼儀正しく、品があり、情け深い子どもに育てることに焦点を当てる。

方針 2：統合された学び

子どもたちは、自らに起こるすべてのことから学ぶのであり、それらをテーマごとに分けることはない。すなわち、子どもたちの学びの経験は、全体として統合されているべきである。複数の領域にまたがった活動を通して、子どもたちは教育や学びのプロセスにおいて、知識やスキルが分離独立したものではなく結びついていることを理解する。充実した文脈において、子どもたちは観察し、調べ、探索し、実際に体験することを通して物事を発見していく。

方針 3：積極的な学び手としての子どもたち

学びの活動は、子どもたちの好奇心、ニーズ、興味に基づいたものであるべきである。授業は、子どもたちの頭を事実に関する知識で満たすだけでなく、むしろ、物事を知り、理解し、自分自身の考えをかたちづくる過程が強調されたものであるべきである。

大人は家庭でも学校でも、子どもたちの学びの経験を促進する際に、以下の点を考慮するべきである。

- ・ 散らかるのをゆるす
- ・ 子どもたちにとって安全な環境を保証する
- ・ 失敗をゆるす

方針4：学びに関心のあるサポーターとしての大人

子どもの学びをサポートするためには、子どものニーズや能力を注意深く見る必要がある。そして、活動の内容が難しいために子どもたちがフラストレーションを感じている場合は、それに気付かなくてはならない。そして、実践と理解を通して子どもたちの自信を築くためにサポートが行われる。

最終的には、子どもたちが活動を通して満足し、自立できることを目的とする。これを達成した時のみ、子どもたちは学びにおいて冒険することができるようになり、そこで大人は子どもたちを次の段階の学びへと導くことができる。

もっとも有能な学び手は、失敗から学ぶことのできる人である。子どもたちが失敗をおそれずに学び、冒険することができるよう促すことを目的とする。

方針5：相互的な学び

肯定的な環境で、子どもと大人との間で広範囲にわたる意味のある相互作用が行われている場合、子どもたちはより探索的な態度を示し、より良い仲間関係を築く。この方針には、以下の意味合いが含まれている：

- ・ 子どもの話

子どもたちが自分の経験を話し、自分の考えや意見を表現し、遊びの際に起きた問題をどのように解決したかを説明するための機会を十分に設ける。子どもたちは相互交渉や対話に積極的に参加するべきである。

- ・ 大人の話

大人は言葉を正しく用いる見本となる存在であり、子どもたちが考えを表現することを促す上で肯定的で支持的であるべきである。優れた教師は、子どもたちの話を聴き、対話をするために十分な時間を取る。また、子どもたちが言うことに価値を置く。

- ・ グループダイナミクス

子どもたちはペアあるいはグループで活動し、大人や仲間と話す機会をたくさん設けるべきである。子ども中心 Child-centred の授業。

- ・ 言葉があふれる環境

子どもたちは教材や環境とも相互交渉する。読み物を多く準備し、子どもたちの手の届きやすいところに設置する。

方針6：学びの媒体としての遊び

遊びは子どもたちの学びに必要不可欠である。遊びは、子どもたちが物事を構成し、判断し、選択し、実行し、我慢し、感情を表現する機会を提供する。子どもたちが自発的に想像的な遊びをすることを促すとともに、言葉を豊富に用いた構造化された遊びの機会を提供することも大切である。このことは、以下のことを育むことを助ける：

- ・ 創造性
- ・ 話し、聞くスキル
- ・ 数字や幼児期の環境と関係のある言葉
- ・ 個人的スキルおよび社会的スキル

実践への応用

良い実践は、たしかな方針に基づく。良い実践の特徴は、以下のとおりである：

1. 子どもから始める
2. 前向きに学習に取り組める雰囲気作り

3. 学びの環境が、よく考えられ準備されている
4. 活動は、目的を持ってしっかりと計画され構成されている
5. 学びの教材が注意深く選ばれ、デザインされている
6. 子どもたちの発達が観察され検討されている

実践1：子どもから始まる

まずは、子どもたちと関わっている大人が、子どもたちのこと（能力、興味、性質）を知ることから始まる。その過程には、子どもたちを注意深く観察することも含まれる。これは、以下のような理由で大切である。

- ・ 意味のある活動を計画するため
- ・ 活動のレベルを的確に定めるため
- ・ 子どもたちが次のレベルに進むのをサポートするため
- ・ 子どもたちの学びの長所、可能性、問題と困難な点を明確にするため

子どもたちの学びの発達は、スキルや考えを身に付ける速さに応じて個人差があるため、それぞれの能力を超えた活動を押し付けてはならない。また、他児と比較してはいけない。大人は、適切なタイミングで適切な内容をもって子どもたちを認め、子どもたちの自尊心を守るようにすることが重要である。

また、保護者や教師は、子どもが問題に直面していることにもっとも気づきやすい。気づくためには、子どもを丁寧に観察する必要がある。長期間にわたってその子どもを観察し、できる限り助け導いてあげることである。もし問題が深刻な場合は、専門家の助言を仰ぐ。早い段階で助けに入れば、その子どもが抱えている困難を解決しやすくなる。

実践2：前向きに学習に取り組める雰囲気作り

大人は、すべての子どもたちが参加していて、安全で大切にされていると感じられるようにする。大人が用いる言葉は前向きで、子どもたちに質問を促し、間違いを犯すことを促すようにすべきである。また、子どもたちが自分の行動や選択に対して責任を負うことを理解できるよう導く必要がある。家庭でのあたたかく、居心地のよい雰囲気が、最適な学びを伝える環境である。

実践3：学びの環境が、よく考えられ準備されている

教師が自由に動き回り、子どもたちとより肯定的な相互交渉を行えることが、積極的な学びを促進する。

学びの場

- | | | | |
|-------|------------|-----------|------|
| ・ 劇遊び | ・ ミニチュアの世界 | ・ 図画工作 | ・ 言葉 |
| ・ 積み木 | ・ 水遊び | ・ 砂遊び | ・ 発見 |
| ・ 図書 | ・ 机で遊ぶおもちゃ | ・ コンピューター | ・ 数量 |

子どもたちが、自分のペースで自分の空間で探索し、自由に一人で考えを試す十分な機会が必要である。保育室に設置された学びの場はそれを可能にする。これらの場での活動は、探索や実験、協力、判断を促すようデザインする。その際、活動で最終的に到達した結果ではなく、その過程に焦点を当てるべきである。

子どもたちの作品を展示する

子どもたちの作品はしばらくの期間、教室や家で創造的に展示されることが望ましい。そうすることで、子どもたちは自分の作品が価値のあるものだと感じる。

実践4：活動は、目的を持ってしっかりと計画され構成されている

大人は、活動の目的と、子どもたちの活動への参加を支える方法を明らかにしておく必要がある。ひとつの活動につき、ひとつかふたつの目的を設定しておく程度が良い。また大人は、子どもたちの学びや発達が個人的、社会的、感情的、身体的、知的とあらゆる領域にまたがって互いに影響し合っていることを理解し、それが計画に反映されるべきである。学びは大人が以下のようにすることで実行される：

- ・ 関連性のある、想像的かつ刺激的で、楽しく挑戦しがいのある経験を計画する
- ・ 毎日の出来事や課題の中で偶発的に起こる学びの機会を、スキルや知識を教えることに活用する
- ・ 活動の目的を子どもたちが理解できるように導く
- ・ 豊かで明確な、文法的に正しい言葉を用いる
- ・ 子どもたちの学びへの姿勢に肯定的な影響を与えるように、子どもたちとかわりサポートする
- ・ 子どもたちの発達を促すよう、学びの次の段階への計画を明確にする

計画された活動は、子どもたちを参加させ、以下のように子どもたちを促すべきである：

- ・ 互いから学ぶ
- ・ 動き、すべての感覚を通して学ぶ
- ・ 考えや興味を探索し深める時間を持つ
- ・ 安全であると感じる。これは、自信をもって学ぶことにつながる
- ・ さまざまな方法で、さまざまな速さで学ぶ
- ・ 学びのなかで結びつきを作る
- ・ 想像的な遊びを作り参加する。これは、言葉の発達と利用を促進する

実践5：学びの教材が注意深く選ばれ、デザインされている

最適の資源と教材は、以下のような特徴を持つことが多い：

- ・ 簡単に手に入り、すぐに使える
- ・ 日頃の課題で日常的に用いられる
- ・ 制限がなく、子どもたちが好きなだけ創造的でいられる
- ・ 刺激的である
- ・ 広範囲の多様な環境から得られる
- ・ 子どもたちにとって魅力的で、興味を維持することができる

コンピューター、テレビ、デジカメなどのテクノロジーは、協力的な遊びや学び、創造性を促進してきた従来の幼児期の活動に取って代わるものではなく、補助するものとして用いられるべきである。大人は、これらのテクノロジーの利用が年齢にふさわしいか、個人的にふさわしいか、文化的にふさわしいか、そして活動内容に関連があるかを判断することが望ましい。教材は、教育の方向を決めるのではなく、あくまでも学びをサポートするものであることを常に頭に置いておくことが大切である。

実践6：子どもたちの発達を観察され、検討されている

子どもに教育をする唯一の方法は、その子をよく知ることである。よく知ることではじめて、その子に適切に応じることができるのである。そして、子どもたちの発達を観察し記録することが、活動の計画や評価において不可欠である。

子どもたちの発達の観察内容は、例えば子どもたちの作品をポートフォリオにまとめることで記録に残すことができる。このような保存方法は、保護者に子どもの発達の様子を伝える上でも役に立つ。教師と保護者が、それぞれの子どもの達成したことや興味を共有し褒めることで、子どもたちは自分が大切にされていると感じ、自尊心を育む。

教師は、家と幼稚園の両方での子どもの観察記録を用いることで、学びにおいて優先すべきことや学びに関係する活動計画を明確化することができる。このようにして、子どもたちが自分の可能性に気づき、目的を成し遂げながら生涯を通した学び手になろうという鼓舞される。

家庭と幼稚園の協力関係

すべての子どもは、社会的存在である。子どもは自分の発達に関して、自分の親が教師と共有し、さらなる発達のための計画と一緒に考える様子を見て、自分が家族だけでなく地域で大切にされていることを感じる。保護者が幼稚園での子どもたちの発達について定期的に知り、そこに関わっていると、子どもたちは充実感を得て楽しんでいる場合が多い。

誠実さや信頼、責任など個人の行動に関する価値観は、子どもたちにとって第一の見本である保護者によってもたらされる。

保護者の役割は大きい。学校は、保護者にとって行きやすい場所であり、子どもたちの発達の全体を助けるために、強力なパートナーであることを認識すべきである。また、保護者が子どもたちの発達について、学級通信や話し合い、定例会などで定期的に情報を得られるようにする必要がある。

<資料3>

幼児期の学び手を育てる

指導原則の実践への応用

シンガポール教育省 就学前教育担当

はじめに

私たちは次のように考えます。

- ・ 子どもは、ひとりひとりが唯一無二の存在である
- ・ 子どもは、ひとり欠かさず大切な存在である
- ・ すべての子どもが、学ぶことができる
- ・ 学びは、生涯を通して行われる
- ・ 私たちは子どもたちに、生きる上で重要なスキルを教える
- ・ 私たちは子どもたちが、学びに対して積極的な姿勢を身につけられるよう育てる
- ・ 私たちは、ひとりひとりの子どもの人生を重視する

教師の役割

- ・ 教室の雰囲気づくり
- ・ 学ぶ環境を用意する
- ・ カリキュラムの作成
- ・ 学びの経験や活動を通して、子どもたちを導く
- ・ 学ぶための資源を選び、デザインする
- ・ 子どもたちの発達を観察し、検討する

教室の雰囲気づくり

自然の気候が植物の健康的な成長に影響するように、教室の「気候」もまた、学びに対する子どもたちの姿勢やモチベーションを左右する。

あたたかく居心地の良い「気候」をつくる

学びを誘発する雰囲気をつくる上で不可欠な要素：

1. 子どもを褒めること
誠実に、嘘のない気持ちで褒めることで、子どもの自己イメージが高められる。そして、何が喜ばれ、何が望ましいかがわかるようになる。
2. 子どもたちの努力を励まし、支えること
特に、間違いをおかしたり失敗したりした時に、その努力を励まし、支える。「よくがんばったね。またやってみよう」と声をかける、あるいは「こういう方法もあるよ」などと傍らからアドバイスをする。
3. 子どもたちと話をすること
話をすることで、子どもたちの興味や好き嫌いを知るだけでなく、子どもたちひとりひとりが、自分は大切に想われていると感ずることができる。よく話をすることは、子どもたちが自分に自信を持つことにつながる。
4. 子どもたちの成功を祝うこと
靴の紐を結ぶなどの些細な出来事でも、子どもたちが成し遂げたことをともに喜ぶ。その中には、簡単には成し遂げられず、しばらくもがいたということもあるだろう。忍耐強くがんばった場合は、おおいに褒める。ただし、あくまでも嘘のない気持ちで褒める。
5. 要所要所で省察する

教育の実践をどのように改善させられるかを省察する必要がある。その際、以下のような問いを立てる：

- ・首尾一貫しているか
- ・目標があいまいになっていないか
- ・子どもたちへの話しかけや習慣、行動の仕方などを通して、良い態度・悪い態度がどのようなものかを子どもたちに確認しているか
- ・正の強化を、十分に行っているか
- ・非難、小言、脅し、けなし、ののしりなどの言葉を使っていないか
- ・悲観的になっていないか、肯定的か
- ・通常の言葉ではなく、赤ちゃん言葉を使っていないか

学ぶ環境を用意する

学びのためのコーナー

子どもたちは、学びの経験を探求し、発見する機会が与えられた時にもっともよく学ぶ。学びのためのコーナーは子どもたちが自分のペースで実験し、創造的な活動をするのできる恰好の場である。自分の考えを伝え、他の子どもたちの話を聞き、ともに活動する際にさまざまな立場を経験する中で、子どもたちは他者について学んでいく。このような環境で、子どもたちは自信を身につけ、自分が有能な学び手であることを知るのである。

学びのためのコーナーを設置する際のポイント：

- ・ 少人数グループでの活動を想定する
1人から5人までの子どもたちが興味を持って参加できるような空間をつくる。この程度の人数では、他の子どもたちとかかわり、友情を築き、ともに問題解決を行いやすい。
- ・ 多様な学びの経験を用意する
幼児教育の最終的な目標は、子どもが自分自身の判断で選択できるよう手助けすることであり、そのためには多様な選択肢を用意することが必要である。例えば、文字、数字、発見、演劇、芸術、積み木、組み立てるおもちゃ、本、砂と水、コンピューター、音楽、運動などの活動が挙げられる。
- ・ 目的のある遊びを促す
自発的で創造的な遊びを促す一方、焦点の定められた目的のある遊びの機会を提供することも必要である。目的のある遊びは、学び、考える能力、コミュニケーション能力、個人的および社会的スキルの幅を広げ、発達させることにつながる。目的のある遊びは、以下のような工夫で容易に取り組める：
 1. 活動時間のはじめに、それぞれのコーナーで何ができるかななどを言葉で説明する
 2. 考えることを促すために、教室の壁に問いかけを貼る
 3. 創造性を刺激するために、写真や絵を展示する
- ・ 教材子どもたちの手に届きやすいところに配置する
子どもたちの手が届く、低い棚に教材を置く。特に鉛筆やクレヨン、いらぬ紙はすぐに取りれる場所に常に置いておく。遊びに使える廃材には、さまざまな大きさの箱や段ボール・色紙・古い雑誌・カタログ・包装紙・カード、小石、落葉・花・小枝、いらなくなった服・カーテン・敷物の生地、さまざまな長さの糸などがある。日常生活で用いられている言葉に触れるためにも、文字の印刷された材料（雑誌、メニューなど）を置くことも忘れずに。
- ・ 掃除の時間を設ける
子どもたちは自分で選択することを覚えるとともに、使った物を片付け掃除をすることも経験しなくてはならない。これは、環境に対する責任感を身につけることにつながる。それぞれのコーナーで、整理整頓しやすいように引き出しや棚を設ける。中に入れるも